

フィリピンにおける価値教育の潮流

長濱, 博文

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻 : 博士課程2年

<https://doi.org/10.15017/7364829>

出版情報 : 国際教育文化研究. 3, pp.65-76, 2003-06-30. Comparative and International Education,
Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



フィリピンにおける価値教育の潮流

長濱 博文

はじめに

本研究は、フィリピン人としてのアイデンティティに深く関わる教育的議題であるフィリピン価値教育の成立と展開を明らかにすることにある。フィリピンは幾多の政治的革命とそれに伴う変遷を経験してきた。その中でフィリピンの人々は自らの『フィリピン人』としてのアイデンティティを自問し、確認し、そして深化させてきたと言えよう。その中でも米国植民地期から既に全土に普及した公教育制度は、慢性的な予算不足の中でもフィリピン人としての価値を浸透させる重要な場を創出し続けたことは確かである。

フィリピン社会の持つ問題点も希望も、フィリピン社会の縮図でもある近代教育制度に反映されているのではないか。そしてもしもフィリピン人の意識形成に直接作用する価値教育が如何に展開されてきているかが解明されれば、フィリピン教育の可能性をさらに広げることができるのではないだろうか。2002 年の新たな教育動向を考慮しながら、フィリピンにおける価値教育が道德教育から発展していく 1980 年代より立ち返り、価値教育の今後の可能性を探る。

一. 「価値教育」の始まり

1. 開発体制下での道德教育から価値教育への変遷

フィリピンは戦後、英語そして、タガログ語を基にしたフィリピノ語の二言語政策を推進してきたが、それとともにフィリピノ語の識字率も上昇してきた。しかし、タガログ語以外にも 80 前後の諸言語があり、100 以上の民族グループの多民族国家を統合するのは多くの困難を伴う。新人民軍 (NPA, New People's Army) の活動を抑えるため、1972 年 9 月にマルコスが戒厳令を布き、『新社会』建設をスローガンに改革を実施する。開発体制を堅持し、その経済的成長で自らの政権の正統性を維持しようとしたマルコスの意図は、以下に分析するように持続的な教育制度の向上にも反映されていた¹。

そして、1983 年に新初等教育カリキュラムに価値教育が示される。更に「中等教育発展プログラム (Secondary Education Development Program)」が継続性を持たせる為にスタートし、1985 年からの試行期間を経て 1989 年に実施された。この時期に政権はマルコスからア

キノに変わり、フィリピンにおける権威主義的開発体制はその正統性を失うことになる²。フィリピンにおける価値教育は開発独裁の思惑から生ずるも、革命により樹立された新政府の下で新たな展開を示すことになるのである。

2. マルコスの強調した「価値」

マルコスは1969年に大統領令 No.202 を出して、フィリピン教育を研究するための大統領委員会（PCSPE）を組織し、大統領布告 6-a が発行された。これは、自由で民主的なシステムの中で次のような国家発展の達成への教育制度の最大限の貢献を保证する政府政策を宣言した³。

- (A) 経済開発と社会発展を促進する割合を達成し、維持すること
 - (B) そのような成長の利益の獲得と享受において全ての人々の最大限の参加を保证すること
 - (C) 変容する世界において国民意識を強化し、望まれる文化的価値を奨励すること
- そして、具体的な教育制度の目標は、以下のようなものであった。
- (a) 各々の個人自身の、社会の特定の生活環境において (1) 人間としての潜在的能力を開発し、(2) 社会の基本的機能において個人と集団の参加の幅と質を高め、(3) 生産的で多才な市民の中に、発展のための基本的な教育的土台を獲得するために個人を助ける広範な一般教育を施すこと
 - (b) 国家発展のために求められる中級レベルの技術において国家のマン・パワーを養成すること
 - (c) 国家のための指導力を与え、研究を通じて知識を進歩させ、そして人間生活の質を向上させるために新しい知識を適用させる高度な専門職を開発すること
 - (d) 教育的計画や評価のシステムを通じて、国家の変化する必要性や状況に効果的に反応すること

そこには、マルコス政権の明確な経済発展、開発促進の意図が見て取れる。と同時にこの時期の教育法には、その後の教育発展の方向性も垣間見ることができる。例えば、1982年教育法(Education Act of 1982)として知られる、Batas Pambansa Blg.232 は、「教育の統合されたシステムの確立と維持のために規定する法令」として知られるが、これは PCSPE レポートや、大統領布告 6-a をさらに精緻に述べたものであった。そこでの『新社会』の教育的目標について Aurelio O.Elevazo と Elevazo A.Rosita は次のように論点をまとめている⁴。

1. 社会の有用なメンバーとしての個人
2. 万人のための教育
3. 教育の統合されたシステム
4. 生産性
5. 研究の強調
6. 変化する必要性和状況に対する敏感な反応

7. 質の高い教育
8. ノン・フォーマル教育
9. 選択的な宗教指導
10. 国家監督と学校管理

この中で述べられている「教育の統合されたシステム」とは、主に広範な普通教育が中級レベルの技術の開発、そして高度な専門職開発の段階的通用の基礎となるということであり、後にみる現在の「統合された教育」の意味合いも含まれているが主意は異なっている。つまり、国家的発展と結びついた、教育の統合的システムの必要性を強調していた。公立・私立間の差別の是正も含めて、学校システム全体の構造を規定しようとしたのである⁵。また、UNESCOの示した『万人のための教育』もまた教育法に示されたが、これもマルコス政権下において軽視されていたエスニック・コミュニティや、学校を持たない遠隔地においては掛け声だけのものであり、識字率は上昇していると同政権は公表したが、実際は読み書きの出来ない割合は増加していたことも隠蔽していたのである⁶。ただ、1982年教育法の内容自体は多くの普遍性を有しており、後の1987年憲法における教育に関する条項にも影響を与え、それとともにフィリピンにおける教育的価値を示した法律としてその重要性は保持されている⁷。

しかしながら、ダロニラ（Maria L. C. Daronila）が指摘しているように、「ナショナル・アイデンティティを文化的に象徴するものが強調され、歴史的な、より個人的なものは、あまり強調されていない。一般化された国家に対する誇りのようなものが強調され、国民としての個人のアイデンティティは比較的強調されていない。これは、結果的に国家に対する抽象的な誇りを与えるだけである。」との指摘は、この時期の教育的価値、特に個人と国家のアイデンティティの関係性を明らかにする⁸。フィリピンにおける上からの民主主義は、国民の民主的価値を保証するものではなかったのである。

3. 1986年以後の教育的価値の変容

1986年にはアキノ新政権の下に価値教育のための対策本部が文部省に設置され、88年5月の第1回教育関係者会議において「価値教育のフレームワーク」草案が提出された。それは1986—1987年度中にあらゆる分野の国民からの意見を集約して改訂が行われ、1988年文部省通達第6号（価値教育プログラム）として発効されガイドラインとなったのである⁹。そして1989年からの中等教育による価値教育の実施は、教科目としてとともに全教科の中で展開されるものとなり、教科としては中等の4年間毎日学習する科目となったのである¹⁰。1987年憲法の教育に関する条項(14条)についてまとめると以下のようなポイントがある。

初めは1987年憲法において(1)「人権としての教育」という概念が打ち出されたことである。1987年憲法14条1項において、国家は『全ての段階における質の高い教育への全ての市民の権利を擁護し、推進する。そして教育を全ての人々にアクセス可能にさせる適切な段階を踏む』と条文化している¹¹。

しかしその一方で、(2)「中期的計画における教育的目標」も示された。再編された国家経済開発公社（NEDA、National Economic and Development Authority）は新執行部の新しい思考に沿って国家開発のための中期的計画形成の先頭に立っていた。しかしながらそこでは、以前とさほど代わり映えのしない「開発」志向の教育・人的パワー部門の目標が提示されていたのである。例えば、①教育と育成の質を改善し、その関係性を深めること、②全ての教育分野において利益を得ていない人々のアクセスを増加させること、③中度・高度なマン・パワーの雇用可能性、生産性、そして自助独立を高めると同様に、経済回復と持続可能な成長によって得られる彼等マン・パワーの発達を増進させること、④社会変容と刷新において必要とされる価値を教え込むこと、⑤国家の望まれる文化的遺産と財産を保全し、高め、そして宣揚すること、⑥スポーツや文化活動における自覚、利益、そして参加の度合いを向上させること、そして⑦どこからも建設的な意見には開かれた、しかし、国威に反目する影響には警戒する方向性において、真にフィリピン的である教育システムを維持すること、が挙げられている¹²。ここに政権が大きく交代したからといって、フィリピン教育の全てが全部変わったとは言えないことが分かる。

他の特徴としては、(3)「教育の統合されたシステムの意味合い」についてである。それまでの教育に関する法律においても、例えば 1935 年憲法、1973 年憲法、そして上述の 1982 年教育法等でも、変わることなく“教育の統合されたシステム”について言及されてきた。しかし、アキノ政権、特に 1987 年憲法制定後のフィリピン教育の進展を考察する時に、この“教育の『統合された (*Integrated*)』システム”は真に意識され、目指すべき教育の方向性を示唆するものとなってきたのである。最後に、(4) 1982 年教育法でも取り上げられていた、ノン・フォーマル教育、つまり、“ノン・フォーマルで、インフォーマル、そして地域に固有の学習システム”を教育機会として公的に支援するということである。これも成文化された条文の真の実践として評価されるものである¹³。

1987 年憲法以後フィリピンの価値教育は極端な国家統合の思惑を離れ、国民生活の健全な向上を目指すものに転換されてきたと考えられる。しかし、革命を成し遂げたことで新たな国民統合の機会を新政府は獲得したのであり、民主的な形でフィリピン人の創出を目指し、新時代の機運を十分に国家統合・国家形成に取り入れようとの意図が作用していたと考えられる。

4. 新旧価値教育の「価値」の相違について

では、より具体的に「価値」が如何に変容しているかを見てみたい。1987 年憲法、第 14 条「教育、科学技術、芸術、文化、スポーツ」の 3 項(2)と、1973 年憲法第 15 条の (4)を比較しながら考察してみたい。1987 年憲法は、「教育制度は、愛国心とナショナリズムを教え、人類愛を育て、人権を尊重し、国家の発展の歴史の中の国民的英雄の役割を賞賛し、市民としての権利と義務を教え、倫理的、精神的な価値を強化し、道徳的品格や自己規律を発展させ、批判的創造的思考を奨励し、科学的技術的知識を広め、職業的効率を高めな

なければならない。」とあるが、下線は新たに 1973 年より書き加えられたものである。平久江は「経済的發展に関する価値」が削除されていることに注目している¹⁴。それとともに、教育制度が抱える価値がさらに広範囲に多様化したことが伺える。この「多様な価値」の広がり、後半に考察する「価値教育フレームワーク」にそのまま反映しているとも考えられる。それだけ現在の価値教育が目指すものは、それまで条文にのみ見出された理想的願望とも解されかねない教育的目標を現実の教室に持ち込む行為であると解される。

さらに 14 条 14 項では、「多様性の中の統一」に基づく国民的文化の振興に関して規定し、17 項では、「国家は、土着の文化的コミュニティの文化や伝統や制度を發展させる為に彼等の権利を認め、尊重し、保護し、国家はこれらの権利を国家の計画や政策の形成過程で考慮していく。」と述べている。これもマイノリティに対する新たな姿勢であり、フィリピンの国民的統一に向けての現実的な対応を示すものと言えよう¹⁵。

二. マカバヤンにみるフィリピン価値教育の新潮流

1. 2002 年基本教育カリキュラム導入の意義について

1986 年以後もフィリピンでは価値教育は随時改革・改善、理論構築がなされてきた。UNESCO などの国際社会で多く検討されている価値教育のフレーム・ワークを大胆に取り入れてきたのもフィリピン価値教育の特徴である。例えば、UNESCO-フィリピン国家教育プロジェクト委員会による 1997 年価値教育プログラムの改訂などがある¹⁶。そして、1998 年の教育令 46 条を受けて、2002 年より新たな基本教育カリキュラム (The Basic Education Curriculum) とその中核となる Makabayan がスタートしたのである。それは 2002 年に策定された基本教育カリキュラム (BEC) によって主要 4 科目 (フィリピン語、英語、数学、科学) 以外の社会科、美術、家庭科、音楽、そして価値教育 (週 1,2 時間) を統合した Makabayan (Love for the Country、愛国心の意) と名付けられた科目の 5 科目に再編させたのである。そこでは価値教育は Makabayan の中に内包されより実践的且つ具体的に展開されることになったのである。Makabayan の展開は、その価値教育の教え方・価値の選択において各学校において多くの裁量を与えていることも特徴としているが、それは各教師の力量・価値観においても教えられる価値教育に相違が出てくることが容易に推測される。

特に統合科目 Makabayan 成立の背景として、途上国特有の問題である教室や教員の不足、十二科目もあったことへの以前からの不評、短い授業時間内でのより効果的な授業への模索などの背景があるとされている¹⁷。この新カリキュラム (BEC) への模索は 1995 年に始まり、様々な主要な人物、機関—学校、親、学生、ビジネス、貿易・産業、NGO、そして専門分野の段階で教育システムを運営する教育部門の人々—と意見交換がなされてきたが、さらにその BEC は、アキノ政権以後のケソンピーン氏 (Dr.Lourdes Quisumbing)、カリーニョ氏 (Dr.Isidro Cariño)、そして ゴンザレス氏 (Bro. Andrew Gonzalez) の各文部省長官の下で行われた 16 年間の研究の産物としてまとめられたものである¹⁸。

2. 「価値教育フレームワーク」の目的・目標

「価値教育フレームワーク」の目的・目標が、1987 年憲法にある「“公正で人道的社会”と自立して民主的な国家の建設に関与する人間の育成」にあることは、2002 年 BEC においても同様である。すなわち、価値教育の実際の展開に関するプログラムや手法は様々に開発されているけれども、その根幹であるフレームワークの構成自体には目立った修正も加えられずにきているのである。そこでは具体的に次のようなフィリピン人を育成することが目的とされる¹⁹。

- 1) 自己を実現し、人間の尊厳意識にめざめ、全人的に発展する
- 2) コミュニティや環境に責任を持った社会的存在となる
- 3) 家族や国家の経済的安定や発展に貢献する生産的人間となる
- 4) 市民として、深いナショナリズムへの意識を持ち、グローバルな団結を通して国際社会全体や国家の進歩に貢献する
- 5) 現実の生活の中で、精神的な存在の反映としての神への永遠の信仰を明らかにする

さらに、このフレームワークは、「価値地図」(The Values Map)として個々の関連する価値に分けられ、大きくは価値教育のフレームワークの中心を成す価値、(1)「中心価値(Core values)」と、それらから派生した価値、(2)「関連する価値(Related values)」により構成される。そして、(1)、(2)とも「人間の尊厳」(human dignity)によって統一されているのである。(1)中心価値(Core values)は8項目に分けられる。そして、(2)「関連する価値(Related values)」もそれぞれに以下のように8項目に分類されるのである。1997 年度改訂版フィリピン文部省価値教育プログラムからまとめると以下になる²⁰。

- A. 健康と自然との調和：全体的健康、清潔、肉体の健全さ、生命への関与と畏敬、環境保全
- B. 真実と寛容さ：真実の愛、批判的思考、創造性、他者への開放と尊敬、未来志向、科学的志向
- C. 愛と良心：自尊心／自己啓発、良心、誠実／正直、自己規律、勇気、信頼、同苦（いたわりと共感）
- D. 世界的な精神性：神への信仰、内面的平和、宗教的寛容、全てのものとの調和
- E. 平和と正義：家族への敬意と愛、家族の強い絆、責任のある親としての行動、人権の尊重、共通善への関心、協調、社会的責任と信頼、創造的善意、公平さ、多様性の賞賛、積極的非暴力
- F. 持続可能な人的開発：経済と社会開発のバランス、環境の保護、資源の懸命な使い方、責任ある消費者意識、生産性と品質、経済的平等さ、職業倫理、企業家精神
- G. ナショナリズム：愛国心、勇敢なる精神・国民的英雄への評価、民主主義、自由と責任、市民意識と能動的参加、関与される指導者精神、国家的統合
- H. グローバリズム：国際理解と堅実さ、相互依存、世界遺産への賞賛、文化的自由、世界平和

ただ、これらの価値体系を理解する上で、2002 年基本教育カリキュラムは、新たな目指すべきフィリピン人としての 4 つの国民性を示したことには注目しなければならない。実際の文章を引用してみると、それは、「理想的な学習者は、急速に変化する世界において、生涯に渡って学習する能力を付与され、如何なる新しい状況においても学ばなければならないことを何でも学習することのできる人物である。そのような人物は如何に学ぶかを学ぶ能力があり、ライフ・スキル（人生を生きる知恵）を持って自己開発できる次のような要素を持った人物である、すなわち **Makabayan** (patriotic)：愛国心があること、**Makato** (mindful of humanity)：人間性が豊かであること、**Makakalikasan** (respectful of nature)：自然を敬愛する精神、そして **Maka-Diyos** (godly)：神への信仰、である²¹。」

3. 新カリキュラムと **Makabayan** 下の価値教育の展開

このように、「価値」を強調する 2002 年 BEC の特徴とは、統合された相互作用の教授－学習アプローチの強調にあり、教師間、教師と生徒間、そして生徒間でのグループ学習や知識と経験の共有に特色がある。例えば、古いカリキュラム下では、英語教師は英語の為の授業準備をし、価値教育の教師は価値教育の為の準備をした。BEC の下では、英語と価値教育の教師達は彼らの授業計画に関してともに作業をする。連繫[相互依存]関係、あるいはチーム教授法はより大きな学習補強(強化)の為に可能なときはいつでも奨励される。設備が使用可能な学校における情報技術の使用とコンピューター・リテラシー（識字）も奨励される。様々な資料と教授ストラテジーを用いて、聞き取り、会話、読書、そして書き取りの四つの主要な技術における言語能力を発達させることを意図する。また批判的思考の開発や、生涯学習の為に学習者への権利付与も目的としている。例えばホセ・リサールの「ノリ・メ・タンヘレ（我に触れるな）」「エル・フィリプステリスモ（反逆）」をクラスで取り上げる時に、文学の教師はそれらを文学として、歴史の教師はそれらを歴史の一部として、フィリピン・ナショナリズムの起源についての議論の入力として討論することができ、あるいは彼の二つの本を書くにおいて、リサールの動機に取り組むことができる²²。

相互の学習アプローチに続いて、教師と生徒の間で、生徒の間で、生徒と自主学习教材の間で、そして生徒と指導に補助されたマルチ・メディアの間で、カリキュラムはさらに相互作用を奨励してきている。このように、**Makabayan** は「生活の実験場」であるか、あるいは健全な個人と国家のアイデンティティを発展させるための全体的学習の実践的な環境となる可能性がある。それはフィリピンの歴史と政治－経済システム、地方文化、手芸、文化、芸術、音楽等の十分な理解を要求するからである。

4. 初等・中等教育における **Makabayan** の展開

Makabayan の中における専門分野は、SIKAP の略語で表されている。S は公民[Sibika (civics)]、芸術[Sining (arts)]を表し、;I は情報技術[Information (and Communication Technology)]を、; K は文化[Kultura (culture)、; AP は社会科[Araling Panglipunan (Social Studies)]、; 保健

[Pangkalusugan (Health)]; 家政学[Pangtahanan (Home) at Pangkabuhayan (Economics)]である²³。1つの概念と価値として、Makabayan はこれらの専門分野の主たる筋道として関与するものと考えられる。以下が初等教育、中等教育における Makabayan の概要である。

初等教育における Makabayan

1. 公民科と文化－第1学年から第3学年までの Makabayan の構成要素である。この科目において子ども達は性格形成活動に従事し、よい行いを発達させ、そして、愛国心、良い市民性、自身の文化的遺産の尊重、そしてフィリピン人肯定 (Pro-Filipino) のような諸価値を教えられる。子ども達もまた、基本的な健康の知識、健全な習慣、そして彼らの直の環境との相互作用を観察し記述するような単純な科学的技術を紹介される。公民科と文化もまた、音楽、美術、体操、そしてゲームを通じて創造的表現を育てる。

2. 地理、歴史そして公民科－これは第4学年から第6学年の Makabayan の構成要素である。第4学年においては、次の項目に重点を置いている：東南アジアと世界の一部としてのフィリピンの地理的特徴、そして物理的な地理と地方文化の関係性。第5学年では、それは、有史以前から現在までのフィリピンの歴史に重点を置いている。そして学習者は過去の人々や習慣、そして思想や出来事が如何に現在を形作っているか、そして如何に人々は望まれる未来を達成しようとしているかを考察する。第6学年では、政府の民主的システムや権利、義務やフィリピン社会における市民の責任に重点を置く。

3. 音楽、芸術、体育、保健－この科目は、子どもが音楽、芸術そして体育を通じて、彼／彼女の感情、想像そして考えを表現することを可能にさせる。子ども達は、基本的な体の動作、ゲーム、音楽技術や芸術の概念を学ぶ。子ども達はより高い学年に進級する時、彼らの体力、Lead-up(先駆け)ゲームにおける適性、音楽性、デザインや建築における創造性の発達がある²⁴。

中等教育における Makabayan

1. 社会科－この科目はフィリピン史や政府（第一学年）、アジア研究（第二学年）、世界史（第三学年）、そして経済（第四学年）をカバーする。

2. 音楽と芸術－この科目は学習者の個人的、社会的、そして審美的技術と価値を発達させることを目的としている。この分野は、リスニング、歌、読書、そして創造を通じて、経験的に学ばれる音楽の諸要素とスタイルの勉強をカバーする。他の国のそれらと同様にフィリピンの音楽と美術の題材は音楽と芸術の考えと価値の理解を深める為に用いられる。

3. 体育－この科目は、選択された身体的エクササイズ、ゲーム、スポーツ、そしてダンスを通じて学習者の身体と運動能力の発達を目的とする。

4. 保健－この科目は、全体的な(全人格的な、肉体的、精神的そして対人関係的)健康を達成、維持する為の学習者の能力を開発する。そして、人口、薬、安全に関する教育を含む。

5. 科学技術と家政学と生計－この科目は、家政学、農業と漁業、工芸、そして企業家精神から成っている。

6. 価値教育—この科目は、自己アイデンティティの形成を目的とし、実生活の状況下で価値の十分な識別、分析、討論、比較、そして選択を行う為に必要である知識と技術を学習者の中に発達させる。それは、経験的学習アプローチや統合学習を通じて、あらゆる学習分野において教えらるであろう。教師は、具体的な生活状況に定着され、対話、自由、そして開放性の環境において議論される、発見、分析、選択、そして選択に学習者を導くことによって推進者(Facilitator)として関与する²⁵。

このように Makabayan とは健全な個人と国家の自己-アイデンティティを発展させる全体的学習のための練習環境の場の創出といった目的に活用されているのである。学習分野として考えられている。それゆえに、Makabayan は学習者が広範囲な技術と諸価値（文化的、審美的、運動的、職業的、そして倫理的）を個人的に処理し組み合わせ創造するのを可能にさせる、統合学習の形体の採用に関与するものとされる。しかし、そのような統合が、完璧でもなければ全てでもないことは当然であろうし、フィリピン文部省も推進者達も認識していることであろう。それでも統合アプローチをここまで大胆に実践していくにはフィリピン人としてそれが有効・必要であるとの確証があるからであろう。それはアキノ政権以後、復権したかに見えるキリスト教の影響もあるであろうし、実際、推進者達の多くが敬虔なキリスト教であることも事実である。そこには悪政に、大土地所有制、ネポティズムのようなフィリピン社会に根深く張り巡らされた伝統的悪習と表裏にある、フィリピン人の美德や家族を大切にする精神を如何に健全に社会に反映させるかとの価値教育推進者達の腐心もあるであろう。しかし、その過程が、キリスト教徒のみによる支配や少数の他宗教徒達に対する偏狭さを醸成することも今後考えられる。Makabayan による新しいフィリピン教育が形成されるには、今後さらに試行錯誤が続くものと考えられる。

終わりに

当然だが気をつけなければならないことは、マルコス政権からアキノ政権に移行したからといって、政治・行政機構の全てが民主化されたわけではないということである。当然価値教育について教える内容は刷新され、マルコス時代の開発に重心を置いた価値教育は正統性を失ったわけだが、マルコス時代にも教育行政の担当官はフィリピン固有の価値や伝統を道徳・価値教育に導入しようと努力していたのであり、その中にはマルコス以前の道徳・価値教育の伝統と、マルコスがリーダーであるために正当性を失ってしまうかに見える、「経済発展」「開発推進」のための多くの価値も国家として当然標榜されるべき価値であるということである。現在開発権などは「第三の人権」として概念化されてきているが、国家指導者の価値観・政治的手法も実際の教育政策に多く反映される。今回の2002年基本教育カリキュラム(BEC)と Makabayan の導入にも、現場から様々な批判も上がっている。支給されない手引き書や評価基準の曖昧さ、それまでの価値教育の教師からの反発などである。それは BEC 制定時の文部省長官であったロコ氏(Raul S. Roco)の政治的プ

レッシャーにより計画が前倒しでスタートした経緯があり、準備不足、コンセンサス不足との指摘がある^{2 6}。

現在までアキノ政権発足時に文部省長官に任命され、現在までその価値教育の推進者であり、立案者であるケソンビーン氏 (Dr.Lourdes R.Quisumbing) が、「Makabayan がうまくいくかどうかを問題にするよりも、如何にそれを向上させていくかが問題だ」とインタビュー時に指摘されていたが、それは幾多の政治的変遷を経験しながらも、それらに左右されないフィリピン価値教育の確立を目指しての事と感じられた。フィリピン価値教育はフィリピン教育を特徴付けるものとなったが、それが目指す思想は Makabayan (愛国心) という国家的意志あるいは意図と、フィリピン人個々人の幸福という理想あるいは希望の織り成す価値体系なのである。

¹ 1980 年代初頭には初等教育入学者は約 93.1%、初等から中等教育への進学者は約 54%。と高い教育水準を維持していた。(中等学校の総数は 5430 校で、約 62%が公立校、約 38%が私立校。中等生徒総数の約 60%が公立、約 40%が私立であった。文部省『フィリピンの教育』文部省大臣官房調査統計課 1985 pp.33-38.)

² 平久江祐司「フィリピンの価値教育のための教育—中等学校における「価値教育」を事例として—」筑波社会科研究 第 14 号 筑波大学社会科教育学会 1995 pp.38-39. 価値教育の初期の展開については、多くを平久江の研究から示唆を受けた。

³ Elevazo, Aurelio O., & Elevazo, Rosita A., *Philosophy of Philippine Education*, Manila: National Book Store, 1995, pp.61-2.

⁴ Ibid., pp.64-77.

⁵ Ibid., p.67./文部省『フィリピンの教育』pp.59-60.

⁶ Ibid., p.67.

⁷ Bauzon, Prisciliano T., *Essentials of Values Education*, second edition, 2002, Manila: National Book Store, pp.152. 1982 年教育法では、『ナショナル・アイデンティティ、文化的意識、道徳的高潔さ、そして精神的活力を促進する普通教育プログラムを与えること』と明記している。Ibid., p.152.

⁸ Daronila, Maria L. C., *The Limits of Educational Change: National Identity Formation in a Philippine Elementary School*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1990, pp.130-131./平久江, p.37.

⁹ 渋谷英章「フィリピンの『価値教育』における学校と地域社会」(金子忠史 研究代表)『学校と地域社会に関する国際社会比較研究・中間資料集①』1996 p.469./平久江 p.39

¹⁰ 更に、1988 年公立中等教育無償法 (Free Public Secondary Act of 1988) 初等から中等への無償の枠を拡大。(参照 同 p.35)

¹¹ それは 2 項以下により具体的に述べられている。Aurelio O.Elevazo & Rosita A.Elevazo, pp.81-2.

¹² Ibid., pp.80-4.

¹³ Ibid., pp.84-87.

¹⁴ 平久江 p.38.

¹⁵ 同 p.39.

¹⁶ UNESCO-National Commission of the Philippines Education Committee Project, *Values Education for the Filipinos*, 1997 Revised Version of the DECS Values Education Program.

¹⁷ Department of Education, *The 2002 Basic Education Curriculum*, 7th Draft, April 15, 2002 [Limited Copies], p.5

¹⁸ *The Basic Education Curriculum for Elementary and Secondary Education*, The Official Web Site of the DepEd of the Philippines, www.deped.gov.ph.

¹⁹ UNESCO-National Commission of the Philippines Education Committee Project, *Values Education for the Filipinos*, 1997 Revised Version of the DECS Values Education Program, pp.2-3.

²⁰ Ibid., pp.6-11

²¹ Ibid., p.8

²² *The Basic Education Curriculum for Elementary and Secondary Education*, www.deped.gov.ph.

²³ Department of Education, *The 2002 Basic Education Curriculum*, 7th Draft, April 15, 2002 [Limited Copies], pp.23-27.

²⁴ Ibid., p.28

²⁵ Ibid., 28-30. 幾つかの社会科からの内容は語学の技術を発展させるのに用いられる。中等レベルの1年から4年においては、この Tool Subject は学術的な交流／ディスコースにおけるフィリピン語 (*Filipino sa Iskolarling Pakikipagtalastasan*、Filipino in Scholarly Exchange/Discourse) となる。それは、フィリピン語でのジャーナリスティック、文学的、政治経済的、参考や実際の文脈を通じて学術的な言語能力の開発における内容として学際的な単語や内容を統合している。www.deped.gov.ph.

²⁶ これは、文部省高官の方へのインタビューにおいて実際に語られた言葉である。しかし、BECに関するフィリピン文部省のホームページには以下のような文面が掲載されている。『ポストに就くとほぼ直ぐに、文部省長官ラウル・ロコは、2001年3月に意見交換を続けた。文部省は、専門家、公立・私立学校の教員、16地域の教育行政官(regional directors)、145人の教育長、少なくとも2,000人の校長、そして異なる学年の異なる科目分野の代表的な教員の方々を含む人々と意見交換してきた。ここに、省令 No.46 条を通じて1998年12月7日に組織された教育改革に関するフィリピン委員会(PCER、The Philippine Commission on Educational Reforms)は、再編された基本教育カリキュラム(BEC)の採用とその2002年に始まる実施を推薦した。』(www.deped.gov.ph)

The Development of Philippine Values Education up to the New Integrated Subject of “Makabayan”

Hirofumi NAGAHAMA

The Philippines emphasize Values Education, which had characterized the Philippine Education after the new era of the Philippine Revolution in 1986. “Values,” invisible and not easy to evaluate, has ever sustained Filipinos’ dignity and self-esteem as the democratic country in Asia. The 2002 Basic Education Curriculum (BEC), however, restructured the curriculum into five learning areas, Filipino, English, Science, Mathematics and Makabayan. Makabayan is the integrated learning subject composed of Philippine history and political-economic system, local cultures, crafts, arts, music and games. Especially the secondary level Makabayan stresses Philippine history and political-economic system, and International relations. Makabayan, meaning love for the country, asks students to develop a healthy personal and national self-identity that has been the aim of Philippines Values education.

Philippine Values education seems to succeed in combining the development of personality and national-identity. The strengthening of nationalism is needed to encourage the people’s motivation of the national development. Philippine Values education, on the other hand, trusts in UNESCO’s framework of Values Education that makes the Filipino Values legitimate in school. Specifically speaking, Makabayan is a “laboratory of life” or a practice environment for holistic learning and may suggest the ideal way to develop humanity and nationalism, which would never turn into a narrow sectionalism, separatism or chauvinism.

Although the Philippines has opened the new possibility of Values Education, its feature suggests that education would never be free from the past and traditional values. The Philippine Values Education, strengthening both the spiritual national unification and the practical human development in a democratic society, might give us a suggestion to open up the new trend of World education, or education for the Global Citizens.